

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 平成 28 年度企画展 2

邪馬台国の時代 3

古津八幡山の頃の信濃川右岸の世界

解説パンフレット

会期 2016 年 7 月 12 日～9 月 25 日

企画展の開催にあたって

本企画展は、2015年に開催した邪馬台国の時代 1「北陸と会津を結んだ古津八幡山―東北南部（会津）の世界―」、邪馬台国の時代 2「縄文のある弥生土器―新潟県北部（阿賀北）の世界―」に続く第 3 弾として企画したものです。

阿賀野川以南に位置する信濃川右岸では、丘陵・台地上やその縁辺に古津八幡山遺跡と同じく防禦を目的として、濠をめぐらしたムラが見られます。今回の企画展では信濃川右岸にある弥生時代中期後半から後期の遺跡を紹介し、その遺跡から出土した遺物から見える中期後半と後期の間にある画期についてと、邪馬台国の時代 2 で扱った新潟県北部（阿賀北）との様相の違い、そして古津八幡山遺跡が成立した時代背景を解明したいと思います。

駒込小丸山遺跡 新潟市江南区駒込字前郷他

遺跡は亀田砂丘前列（新砂丘Ⅰ-1 列あるいはⅠ-2 列）に立地し、舌状に突き出た砂丘南斜面および南側の水田に広がっている。標高は 2～3 m である。本発掘調査は、農協野菜集出荷センター建設に伴い横越村教育委員会によって 1981 年に行われた。縄文時代中期・晩期と弥生時代中期を中心とした古代までの複合遺跡である。

検出された遺構は竪穴住居 1 棟と土坑 1 基である。竪穴住居は調査区の端で検出されたため半分のみ調査であるが、平面形はほぼ円形で、未調査部分を推定すると直径約 7.5m と推測されている。地山の褐色砂層を掘り込んで住居が造られており、覆土の黒褐色砂質土から弥生土器が見つかった。住居内からは柱穴 3 基と土坑 1 基が検出されている。



竪穴住居から出土した土器は、弥生時代中期後半の北陸系（小松式）を主とし、長野系（栗林式）、会津系（川原町口式）が少量ある。遺物包含層からは、同時期の秋田系（宇津ノ台式）、弥生時代前期末・後期の土器も見られる。また、碧玉片が竪穴住居内から出土しており、小松式土器の伝播とともに北陸から波及した玉作りに関わる遺物と考えられる。

石動遺跡 新潟市東区本所字居浦他

遺跡は阿賀野川河口から 4.5km ほど内陸へ入った石山砂丘列（新砂丘Ⅱ-2 列）東端付近の小砂丘に立地する。現在の新潟北高等学校付近で、標高は 1 m 前後である。本発掘調査は、県道建設計画に伴い新潟市教育委員会によって 1995・1997 年に行われた。弥生・古墳・平安時代、中世の複合遺跡である。検出された遺構のうち、明確に弥生時代のものと言えるものはない。

遺物は、遺物包含層からの出土が大部分で、弥生時代中期後半から後期、古墳時代初頭が主体を占めている。中期後半の土器には、北陸系（小松式）、秋田系（宇津ノ台式）、北陸系と秋田系の折衷型式（山草荷式）を主体とし、会津系（川原町口式）、長野系（栗林式）が少量見られる。後期は前半の北陸天王山式系（砂山式）がまとまって見つかったが、北陸系（法仏式）は少ない。東北系を

見る限り後期後半は少なく、弥生時代終末～古墳時代初頭になると、再び北陸系土器が主体を占めるようになる。

北陸系（小松式）・秋田系（宇津ノ台式）と、両者の折衷型式（山草荷式）が出土している典型的な遺跡であるが、一括性などの出土状況の仔細が不明なことが惜しまれる。

寛下遺跡 五泉市山崎字寛下

遺跡は新津丘陵の東側を流れる能代川沿いの沖積地に立地し、標高は 9 m 前後である。本発掘調査は、能代川改修事業に伴い五泉市教育委員会によって 2002 年に行われた。縄文時代から近世までの複合遺跡であり、弥生時代については中期後半の遺構・遺物が見つかった。ただし、遺構・遺物ともに検出数は少ない。



弥生時代の遺構は、土坑 4 基と溝 1 条が検出された。また、遺物はこれらの遺構からの出土が多く、遺構外からの出土は少ない。

土坑（SK100）は、長軸 2.78m、短軸 0.93m の長楕円形で深さは 7 cm と浅いが、覆土から重菱形文の構図を持つ北陸系（砂山式）と口縁端部にキザミを持つ無文の甕の 2 個体が出土しており、土坑墓の可能性はある。中期後半の遺物量は少ないが、北陸系（小松式）が主体で、秋田系（宇津ノ台式）が 1 点ある。会津系・長野系は見られない。

遺物量が少ないため不明な点が多いが、五泉市では弥生時代中期・後期の遺跡が少ないこともあり、今後の調査による新知見が待たれるところである。

内野手遺跡 三条市上野原字内野手

遺跡は信越本線保内駅より 2 km ほど南西にあり、東山丘陵の緩やかな傾斜地に立地する。標高は 33m、平野部との比高差は約 21m である。本発掘調査は、中小企業大学校建設事業に伴い三条市教育委員会によって 1989 年に行われた。調査の結果、弥生時代中期と古代の遺構・遺物、縄文土器が確認された。

弥生時代の遺構は、周囲に溝を巡らせた「方形周溝墓」という四角い墓 1 基である。方形周溝墓は溝の四隅が途切れる形態で、4 辺のうち 3 辺が調査区内で検出された。墳丘規模は東西で 10.5m である。中心にあったと推測される埋葬施設は検出されなかった。弥生時代の遺物の大半が方形周溝墓の溝から出土しており、北側の溝からは会津系（川原町口式）の壺 2 個体が見つかった。この他にも北陸系（小松式）・長野系（栗林式）の弥生時代中期後半の土器がある。



本来、会津系土器を使う集団は方形周溝墓を造らないが、本遺構では北陸系や長野系の土器も出土していることから、3 系統の集団が墓の造営に関わった可能性を想定することができる。

北潟甲遺跡 三条市北潟甲他

遺跡は東山丘陵沿いにあり、信越本線帯織駅の北側約 1 km の沖積地に立地する。標高は約 14m である。本発掘調査は、県道大面・保内線建設事業に伴い栄町教育委員会によって 2002 年に行われた。弥生・古墳時代を中心とした複合遺跡である。



検出された遺構は、溝状遺構 9 条、土坑 1 基、性格不明遺構 1 基、焼土 1 基、ピット 40 基である。このうち弥生時代の遺物が出土した遺構は溝状遺構 2 基、土坑 1 基、ピット 1 基である。

弥生時代の遺物はほとんどが遺構外からの出土であり、中期と後期の遺物が見られる。弥生時代中期の土器は、北陸系（小松式）、会津系（川原町口式）、長野系（栗林式）が一定量あり、秋田系（宇津ノ台式）が若干見られる。一方、後期になると北陸系が主体となり、他系統ははっきりしない。

この北潟甲遺跡からは中期と後期の遺物が出土しているが、土器の系統差からわかるように遺跡は継続して営まれたものではない。

中沢遺跡 加茂市下条字中沢乙他

遺跡は加茂市役所から南西方向に約 1 km のところあり、下条川右岸の沖積地に立地する。標高は約 7 ～ 9 m である。本発掘調査は、道路建設事業に伴い加茂市教育委員会によって 2000・2001 年に行われた。弥生時代後期と奈良・平安時代を中心とした複合遺跡である。ここでは弥生時代後期について紹介する。



遺構については、明確な建物は判明しなかったが、1 m 前後の隅丸方形もしくは長方形の土坑や、2 ～ 3 m の土坑が散在し、ピットが多く検出されている。

土器は、甕の口縁部に数条の線を施した擬凹線文という特徴をもつ北陸系の土器が主体となっており、各器種がそろっていることが特徴である。また、東北南部系（天王山式）土器が 1 点も出土していないことは特筆される。

土器の内面を削り、器壁を薄く仕上げるなど、北陸地方南西部の土器（法仏式）と技法上の共通性・類似性が高く、北陸南西部から移住した集団によって営まれた可能性が高い、平野部の集落として注目される。遺物は弥生土器のほかに、時期は不明であるが緑色凝灰岩製の管玉の製作工程品がある。

経塚山遺跡 三条市如法寺

遺跡は東山丘陵上に位置し、標高は 72 m である。通称「経塚山」と呼ばれる場所で、平野部との比高は 58 m を測る。発掘調査は、水道用水供給事業に伴い、三条市教育委員会によって 1989 年に行われた。弥生時代後期の高地性環濠集落である。

遺構は、断面が V 字形の環濠が 2 か所で確認され、ほかには堅穴住居 3 棟、溝（環濠）3 条が確認されている。環濠の規模は大きいほうで幅 2.25 m、深さ 1.2 m を測る。堅穴住居はいずれも調査区の端部分で検出されたため全体の形は不明であるが、平面形は隅丸方形と考えられる。比較的全容が判明した 2 号住居は、東側が調査区外であるが長軸が 4.7 m を測る。住居の内側には壁溝がめぐり、ピット 2 基と貯蔵穴、焼土が 2 か所で検出された。

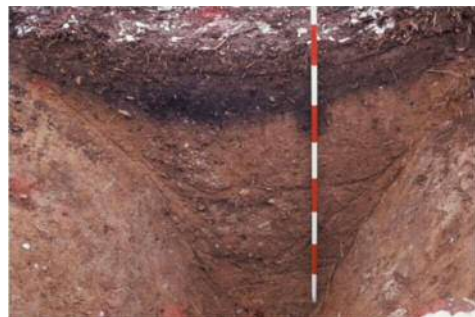


遺物には遺構の内外から出土した土器と鉄斧がある。土器は北陸系の法仏式を主体とするが、高杯・器台・鉢など精良なものが目立ち、北陸南西部から移住した集団による可能性が高い。また、長野系（箱清水式）・東北系（屋敷式）が数点ずつ見つかり、3 系統の併行関係を示している。鉄斧は、3 号住居から出土したもので、横断面が同じ厚さで作られた板状鉄斧であり、朝鮮半島産と考えられている。

大平城遺跡 見附市島切窪町大平

遺跡は見附市街地の東に位置し、東山丘陵から突き出た尾根状の標高 102 m のところに立地する。この場所が北陸自動車道建設に伴う土取予定地となり、新潟県教育委員会によって 1973 年に発掘調査が行われた。当初は大平城として城跡の認識であったが、縄文・弥生時代、古代・中世の遺物が確認されている。

調査の結果、環濠と方形台状墓 2 基が確認されている。環濠は断面 V 字形となり、立地場所が周辺との比高が 80 m もあることから防禦的な意味合いの強い高地性環濠集落と考えられる。



2 基確認された方形台状墓の規模は、北側にあるものが全長 16 m、南側にあるものが全長 10 m を測る。2 基とも周溝が確認されているが、全周するものではなく一部が途切れる周溝を設けていると考えられる。

弥生時代の遺物は後期の土器が見つかり、北陸系の土器を主体として、少量であるが畿内系の土器も認められる。

出土した遺物から、弥生時代後期の営まれた高地性環濠集落と、そこに造られた墳墓と考えられる。

舟戸遺跡 新潟市秋葉区古津字舟戸他

遺跡は信越本線古津駅のすぐ西側にあり、新津丘陵から流れる金津川によって形成された自然堤防上を中心に立地する。標高は 4 m ほどである。本発掘調査は、ビル建設に伴い新潟市教育委員会によって 1974 年に行われ、次いで宅地造成に伴い新潟市教育委員会によって 2015 年に行われた。隣接する弥生時代中期後半や古墳時代後期の遺跡である塩辛遺跡も含めると、31 万 m² に及ぶ大規模な遺跡である。本遺跡は新潟最大の古津八幡山古墳を築いた豪族の居館推定遺跡としても注目されている。

2015 年の発掘調査の意義は、史跡古津八幡山遺跡で高地性環濠集落が営まれる直前の弥生時代中期後半の遺物や、古津八幡山遺跡出現後の後期前半と後期終末の遺物が検出されたことである。また、中期後半・後期前半と、後期終末の弥生土器が層位的に出土したことは重要である。

中期後半は北陸系（砂山式）・北陸系（小松式）・長野系（栗林式）・秋田系（宇津ノ台式）と多系統の複雑な様相を示すが、後期前半は北陸天王山式（砂山式）・東北南部系（天王山式）、後期終末は全面ハケメ調整の在来系（八幡山式）の系譜を引く土器となっている。

大倉山遺跡 五泉市橋田字寺本戊

遺跡は新津丘陵東側の丘陵頂部に位置し、標高は約 74 m である。平野部との比高差は約 60 m を測る。弥生時代後期の土器や石器が採集されていることから、高地性集落と考えられる。新津丘陵西側に位置する史跡古津八幡山遺跡の南東 5 km 程にある。

未調査のため環濠や住居などの遺構については不明であるが、丘陵の頂上から中腹にかけて遺物が散布しており、地元の郷土史家によって多くの土器や石器が採集されている。遺物は弥生時代後期のもので、土器は北陸系を主体とし、縄文の施文された東北南部系（天王山式系）もある。また、北海道を中心に分布している続縄文土器（後北 C 1 式）が 1 点見つかり、この続縄文土器は日本海側の南限が新潟県であり、新潟県内の海岸線の遺跡を中心に点々と検出されている。

遺構の有無、特に環濠の有無が不明であるが、周囲との比高がある立地状況を考えると高地性集落と考えられる。新潟県内に分布する続縄文土器が見つかった遺跡の中では、大倉山遺跡が最も内陸に位置しており、北海道から南下してきた人々は海路を使い、その海路から河川といった内水面交通を利用した移動が想定できる。

中店遺跡 南蒲原郡田上町大字田上字追越他

遺跡は、信越本線田上駅から北東側に500m程の新津丘陵上に位置し、西向きの緩やかな尾根上に立地する。標高は約65mで、平野部との比高差は55mを測る。史跡古津八幡山遺跡の南方約5kmの場所である。本発掘調査は、ゴルフ場造成に伴い田上町教育委員会によって1974年に行われた。

遺構はピット状の遺構が大小合わせて2基検出されている。大きいほうの平面形は円形で、直径0.7mを測る。いずれの遺構からも弥生土器片が出土している。弥生土器は遺物包含層からの出土が大半であるが、1点のみほぼ完全な形で壺が見つかった。この壺は、東北南部系（天王山式）土器で、口縁部から頸部を欠損するが、底部を下にして直立した状態で出土した。掘り込みは不明であるものの、埋設された可能性が高く、壺棺墓と推定される。出土した弥生土器は、東北南部系が主体であるが、器面をハケメ調整したものも見られる。



本遺跡は、丘陵上に立地することから防禦を目的とした高地性集落と考えるむきもあるが、東北南部系土器（天王山式）主体であることから別の性格を考えた方が良いであろう。

横山遺跡の周辺（長岡市と見附市の市境周辺）

横山遺跡の周辺の猿橋川流域には、弥生時代から古墳時代の大規模な遺跡が見られる。いずれも東山丘陵から派生した丘陵や、突き出た尾根周辺に立地しており、1km内外の近接した距離に分布している。

弥生時代後期から古墳時代早期にかけての環濠集落と、墳墓からなる横山遺跡を中心にみると、北側に弥生時代中期・後期と古墳時代早期・前期を主体とする五斗田遺跡と弥生時代後期の集落と墳墓の見つかった藤ヶ森遺跡、そして横山遺跡の南側には弥生時代中期から後期にかけての環濠集落と推定される原山遺跡が存在する。一方、見附市側では弥生時代中期から後期の環濠集落である高稲場遺跡や、同時期の高地性集落の岩沢遺跡がある。

標高が高く平野部との比高差のある高地性集落と、比較的標高の低い丘陵にある環濠集落、さらには沖積地に立地する集落がある。沖積地の集落も見られるが、防禦的集落が集中している地域と言える。

新潟県内で弥生時代から古墳時代への移行期の集落が、これだけまとまっている地域は少なく、十分な調査がなされないまま多くの遺跡が壊滅してしまったことは遺憾である。

高稲場遺跡 見附市田井町

遺跡は見附市と長岡市の市境付近にあり、東山丘陵から突き出た細長い尾根上に立地する。標高は40～45m程で、周囲の低地との比高は15～20mを測る。総合スポーツレクリエーション基地の建設構想が出されたために、見附市教育委員会により1987年に確認調査が行われた。調査では縄文・弥生時代の遺構や遺物が検出された。

弥生時代の遺構は竪穴住居1棟、溝状遺構4条等である。竪穴住居は部分的な検出であるが、直径が5mで平面形が円形と推定されており、後期の北陸系（法仏式）土器が出土している。溝状遺構は、1号溝が断面V字形で、幅1.6m、深さ0.6m、4号溝が断面U字形で、幅1.5m、深さ0.4mを測る。溝状遺構は環濠と考えられており、環濠集落と推定されるが、中期後半から後期のいずれの時期かは明らかではない。



遺物は中期後半から後期の弥生土器と石鏃などがある。中期は長野系（栗林式）を主に会津系（川原町口式）・北陸系（小松式）、後期は北陸系（法仏式）を主に東北南部系（天王山式系）の土器が見られる。近接する高地性集落の岩沢遺跡では後期の北陸系（法仏式）の竪穴住居が4棟検出されており、横山遺跡等との関係で重要な遺跡と考えられる。

藤ヶ森遺跡 長岡市亀崎町字藤ヶ森他

遺跡は東山丘陵から突き出た尾根の先端部に位置し、標高は約26～32mを測る。周囲の水田の標高は20m程である。本発掘調査は、圃場整備事業に伴い長岡市教育委員会によって1998年に行われた。

弥生時代の遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟などの居住を示す遺構と、方形周溝墓1基と調査区南側の丘陵上に方形台状墓2基といった墓が確認された。

竪穴住居は斜面側が一部削平されているが、平面形は一辺7m程の隅丸方形で、内部からは壁溝・柱穴・貯蔵穴・炉跡といった施設が検出された。遺構からは弥生時代中期から後期の土器や石鏃が出土しているが、住居形態から判断して後期の竪穴住居と考えられる。

方形周溝墓も斜面側が一部削平されているが、規模は4.2mを測る。四隅の溝が切れない周溝墓で、東側の周溝のみ中央部が墓道状に切れている。埋葬施設は確認されていない。



方形台状墓の規模は1号台状墓が15m、2号台状墓が11mを測る。1号台状墓は一部周溝があり、頂上には埋葬施設と考えられる落ち込みが確認されている。いずれの墓も不明な点が多いが、弥生時代後期に造られたと考えられている。

五斗田遺跡 長岡市亀崎町字五斗田

遺跡は東山丘陵から突き出た尾根の先端部が埋没する付近の沖積地に立地し、標高は約20mを測る。本発掘調査は、圃場整備事業に伴い長岡市教育委員会によって1999年に行われた。弥生時代中期・後期と古墳時代早期・前期を中心とした複合遺跡である。



遺構は古墳時代の掘立柱建物2棟、土器溜まり1基、方形周溝状遺構1基などが確認されている。しかし、弥生時代の遺構は確認されていない。

弥生時代の遺物の多くは遺物包含層からの出土であり、弥生時代中期の土器には会津系（川原町口式）・北陸系（小松式）、長野系（栗林式）、後期の土器には北陸系・東北南部系がある。

一方、古墳時代の遺構は出土した遺物から土器溜まりと方形周溝状遺構があげられる。方形周溝状遺構は、約15m×14mの方形の高まりの周囲に溝がめぐるもので、溝まで含めると23m×21.6mの規模となる。この方形状の高まりには約9m四方の溝跡があり、その内部にはピットが検出されており、周溝をもつ竪穴住居と考えられる。古墳時代の遺物は、古墳時代早期・前期は北陸北東部の土器が多く、少量であるが畿内系の土器も見られる。

横山遺跡 長岡市桂町字横山他

遺跡は東山丘陵沿いの小丘陵上に立地し、標高は約26m、平野部との比高は約6mを測る。第2次世界大戦後にはすでに知られた

遺跡であったが、土砂採取等により丘陵が徐々に削られていった。そこで、遺跡の内容と遺存範囲の把握のために 1985 年に長岡市教育委員会により確認調査が行われ、環濠集落とされた。



さらに遺跡内容の解明を目的として 1986 年に同教育委員会により本発掘調査が行われた。環濠で囲まれた居住範囲は 5,000 m²程と推定されている。弥生時代後期から古墳時代早期を中心とした環濠集落である。

調査の結果、環濠が 3 条、その環濠の内側に竪穴住居 4 棟、環濠の外側には方形周溝墓 1 基などの遺構が確認されている。環濠の中でも最大規模の 1 号環濠は、検出された全長を合わせて 60m、幅は約 2 m、深さ約 1 mを測る。1 号環濠は、当初は断面逆台形であったものが再掘削により断面 V 字形になっている。竪穴住居の平面形は 3 棟が隅丸方形（1・2・4 号）、1 棟のみ方形（3 号）である。方形周溝墓は、すでに半分が削平されており全体が判明しないが、規模は確認できたところで全長 11.5mである。



出土した弥生土器は、北陸系の後期後半（法仏式・月影式）が主体で、東北南部系（天王山式系）がごく少量伴う。八幡山 4・5 期併行であるが、環濠は 5 期併行が主体となるようだ。

この他に、中期後半、後期前半の弥生土器破片が環濠や竪穴住居などからまとまって出土しており、会津系（川原町口式）・北陸系（小松式）・長野系（栗林式）・東北南部系（天王山式）などが一定量見られる。これらは環濠集落形成以前のものと考えられるが、各地域の様相が複雑に入り混じった当該期の特徴をよく示している。

城之古遺跡 十日町市城之古上塚原他

遺跡は飯山線・北越急行ほくほく線十日町駅から南西に 2 kmほどのところに位置し、信濃川右岸の河岸段丘の縁辺部に立地する。標高は 144m、信濃川現河床との比高は約 15mを測る。北越本線建設に伴い、新潟県教育委員会によって 1973 年に発掘調査が行われ、縄文・弥生時代、中世の遺物が確認された。その後、圃場整備事業に伴い十日町市教育委員会によって 1994・1995 年に発掘調査が行われている。今回の展示資料は当該調査により出土したものである。調査により柱穴等の遺構が検出されている。

遺物には土器・土製品、石器や玉類などの石製品がある。弥生土器には、中期後半の長野系（栗林式）を主体に、在地で作られたと考えられる北陸系（小松式）土器がある。また、土器片を転用した紡錘車が多数見つかっている。

石器は石鏃・磨製石斧があり、磨製石斧は扁平片刃石斧と長野市榎田遺跡で作られた太形蛤刃石斧などがある。石製品は玉類が出土しており、完成品の管玉と未成品の管玉や、白玉の未成品や破片が見つかっている。

旧堀之内町の弥生時代の遺跡

（布場平 D 遺跡・春日平遺跡・古林古墳群）

布場平 D 遺跡は、魚野川左岸の田河川右岸に形成された河岸段丘上に立地し、標高は約 142mを測る。広域営農団地農道整備事業に伴い、堀之内町教育委員会により 1984 年に発掘調査が行われた。展示品は、8 号土坑の覆土から出土したもので、体部上半に重菱形文の構図を描く中期後半の秋田系（宇津ノ台式）土器である。

春日平遺跡は、魚野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は 100mを測る。本発掘調査は県道改良工事に伴い堀之内町教育委員会によ

り 1993・1994 年に行われた。確実な弥生時代の遺構は検出されていないが、ほぼ完全な形で壺が見つかっている。この壺は、後期の東北南部系（天王山式）土器で、口縁部を欠損するが、底部を下にして直立した状態で出土した。掘り込みは不明であるものの、埋設された可能性が高く、壺棺墓と推定される。

古林古墳群は、魚野川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は 100m前後である。堀之内インターチェンジアクセス道路建設に伴い、堀之内町教育委員会により 1991 年に確認調査が行われた。展示品は 1 個体つぶれた状態で、遺構に伴わずに出土した後期の東北南部系（天王山式）の壺形土器である。単独出土であり、壺棺墓の可能性が考えられよう。

魚沼川流域の東北南部系（天王山式）土器

魚沼川流域では、弥生時代中期後半には長野系（栗林式）土器が大半を占め、それらに伴って打製石斧（石鏃）・打製石庖丁が出土している。同様な石器は長野県南部で類例が多く、平野部の少ない地域の河岸段丘や扇状地で、陸稲や雑穀の栽培が行われたと考えられている。北陸から水稻耕作が伝わった県内の他地域とは異なる農業形態だったのである。

魚沼川流域や十日町市周辺では、中期後半の遺跡は明らかであるが、後期になると遺跡数は激減し、長野系（吉田式・箱清水式）、北陸系（猫橋式・法仏式）ともにほとんど見られなくなり、代わって東北南部系（天王山式）土器が出土する。古林古墳群・春日平遺跡・黒姫洞窟遺跡・飯綱山遺跡・北沖遺跡・来清東遺跡・下田遺跡等である。中期後半の秋田系（宇津ノ台式）の重菱形文の土器が、布場平 D 遺跡や来清東遺跡で見つかっており、同じルートで東北南部系（天王山式）土器がもたらされたものであろう。壺や甕の単独出土が目立ち、田上町の中店遺跡の壺と同じく壺棺として用いられたものが多いと考えられる。この頃、東北南部系（天王山式）土器は、富山県や石川県でも出土しており、海岸ルートでも広域に移動していたことが分かっている。

来清西遺跡 南魚沼市塩沢字来清他

遺跡は魚野川左岸にあり、来清東遺跡の北西側に位置する。魚沼丘陵を源とする鎌倉沢川による扇状地の扇端部に立地し、標高は約 193mである。本発掘調査は県道建設事業に伴い塩沢町教育委員会によって 2000 年に行われた。弥生時代中期と古墳時代後期の遺跡である。



遺構は土坑 7 基・焼土 11 基・柱穴などが検出された。これらの遺構のうち弥生時代中期の土器が出土したのは 7 号土坑と柱穴（P 6）である。7 号土坑からは長野系（栗林式）土器の壺が出土し、P 6 からは長野系（栗林式）の注口土器が出土している。

土器以外の石器には、石鏃・打製石斧・磨製石斧・打製石庖丁・磨石等がある。打製石斧は短冊形と撥形があり、鏃として使用していたと考えられている。磨製石斧は太形蛤刃石斧で、石槌に転用されている。打製石庖丁はイネ科植物の刈り取りに用いたもので、この形態に近いものも長野県南部を中心に分布している。磨石類は食物加工に用いられたものであろう。これらの石器類は千曲川流域に類例が認められ、土器・石器ともに中部高地（長野県）の影響を受けていると言える。

来清東遺跡 南魚沼市塩沢字来清他

遺跡は上越線塩沢駅より南西に 400m程の場所にあり、来清西遺跡と同様に、鎌倉沢川による扇状地の扇端部に立地する。標高は約 187mである。本発掘調査は、県道建設事業に伴い塩沢町教育委員

会によって 1998・1999 年に行われた。弥生時代中期から古墳時代中期にかけての複合遺跡で、ここでは弥生時代について紹介する。

遺構は、竪穴住居 1 棟・掘立柱建物 1 棟・土坑などが検出されている。竪穴住居全体の約半分が調査区外のために全形は不明であるが、平面形は円形または楕円形と考えられる。規模は長軸約 5.5m を測り、内部施設は柱穴 2 基と炉跡が検出された。遺物はほぼ床面上から弥生中期後半の長野系（栗林式）土器のみが出土している。



弥生土器は、竪穴住居以外は遺物包含層からの出土である。中期後半の長野系（栗林式）土器のほかには、後期前半の東北南部系（天王山式）が一定量見つかっており注目される。

1998 年に出土した大形壺 2 個体と甕は、天王山式の古い様相を残している。秋田系（宇津ノ台式）かと思われる中期後半の 1 点があるが、ハケメ調整されたものは認められず、砂山式との近似性は見られない。

黒姫洞窟遺跡 魚沼市大白川字サッパタ

遺跡は福島県境に近く、その県境から流れる破間川支流の大白川に流れ込むイヲノ沢右岸に立地する自然洞窟である。標高は 500m で、イヲノ沢川床との比高は約 5 m である。調査は 1999 年の試掘調査に始まり、その後は学術調査が入広瀬村教育委員会・魚沼市教育委員会・魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団によって継続されている。時期は縄文時代草創期～早期と弥生時代後期からなる複合遺跡である。



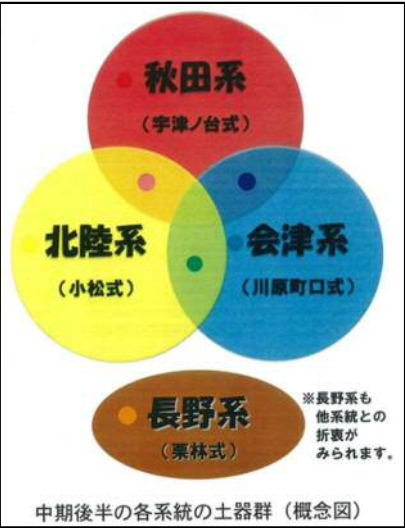
I 層および II 層上面から、礫群 5 基・炉跡 1 基と焼土範囲 6 か所が確認され、付近から弥生時代後期後半の弥生土器と石鏃・石匙・石錐などが見つかった。弥生土器は出土量は少ないが、東北南部系（屋敷式）、長野系（箱清水式）、北陸系（法仏式）の 3 系統が認められ、極めて興味深い様相を示している。

同様な弥生時代の洞窟遺跡に、阿賀野川流域の県境付近の福島県耶麻郡西会津町塩喰岩陰遺跡がある。黒姫洞窟遺跡も同様なキャンプ地であったと考えられ、会津・長野・北陸日本海側から来た人々がこの地で往来し、情報や物資を交換していたのではないかと推察される。

終わりに

弥生時代中期後半、信濃川右岸地域では北陸系（小松式）・会津系（川原町口式）・長野系（栗林式）・秋田系（宇津ノ台式）の 4 系統の土器と、各系統の要素を併せ持った折衷土器が使われていました。信濃川上流域から魚沼川流域の魚沼地域では長野系土器が大半を占めていました。

ところが、後期になると東山丘陵や丘陵沿いの平野部では北陸系（法仏式）土器が主体となるムラが造られます。中には加茂市中沢遺跡や三条市経塚山遺跡のように、北陸南西部から移住した人々によって営まれたと推定されるムラも出現します。魚沼地域では長野系はなく



なり、代わって東北南部系（天王山式）土器に取って代わられます。

後期前半の遺跡では、北陸系に東北南部系土器がほとんど伴わないことが一般的ようです。東北南部系土器は、魚沼地域のように単独で出土することが多いように見受けられます。信濃川右岸地域で、再び北陸系とともに東北南部系（屋敷式）や長野系（箱清水式）土器が一定量伴うようになるのは後期終末から古墳時代初頭頃になります。

2015 年の企画展「邪馬台国の時代 2」で紹介した新潟県北部（阿賀北）では、中期後半には、秋田系・北陸系・会津系の 3 系統の土器と北陸系の「櫛描文」手法で、秋田系の構図である重菱形文を施文したり、秋田系の器形に「櫛描文」手法で波状文や鋸歯文を施文した折衷土器が見られます（「山草荷式」：今回展示の石動遺跡が典型）。そして、後期になると各系統の要素を取り入れた日本海側の天王山式系土器として「砂山式」が成立します。後期前半、阿賀北では東北南部系（天王山式）・北陸天王山式系（砂山式）が主体で、北陸系土器はほとんど伴いません。阿賀北で北陸系土器が一定量伴うようになるのも後期終末から古墳時代初頭の事です。

古津八幡山遺跡では、後期をとおして北陸系・東北南部系・折衷系土器（八幡山式）の 3 系統が使われています。後期終末から古墳時代初頭頃になると、これら 3 系統とともに長野系土器も少量ですが出土するようになります。この頃、人々の動きに変化が生じたものと考えられます。古津八幡山遺跡では見つかっていませんが、県内で出土している続縄文土器もこの頃です。日本海を介して北方との交流も活発化したことが窺えます。

新潟県内の弥生時代の遺跡の動態を見ると、中期後半から後期に継続しているように見受けられる遺跡がありますが、土器の系統が大きく変化しているので、その間に画期・断絶があったと考えられます。県内の後期初頭の遺跡の実態が良くわからないことが課題ですが、古津八幡山遺跡では後期前半にムラが造られ、環濠が掘られます。また、中期の遺物が 1 点も見つかっていないことも重要です。古津八幡山遺跡が成立する背景には、この頃の社会の大きな変化が影響していたと考えられます。

古津八幡山遺跡が出現する前後の、後期初頭から前半にかけての動向は、「邪馬台国の時代 4 古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界―六地山遺跡里帰り展―」でも解き明かしていきたいと考えています。

本企画展の開催にあたって、下記の機関等よりご協力いただきました。

笹澤正史 魚沼市教育委員会 加茂市教育委員会
五泉市教育委員会 三条市教育委員会 十日町市教育委員会
長岡市教育委員会 見附市教育委員会 南魚沼市教育委員会
（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟県立歴史博物館
（敬称略、五十音順）

お知らせ

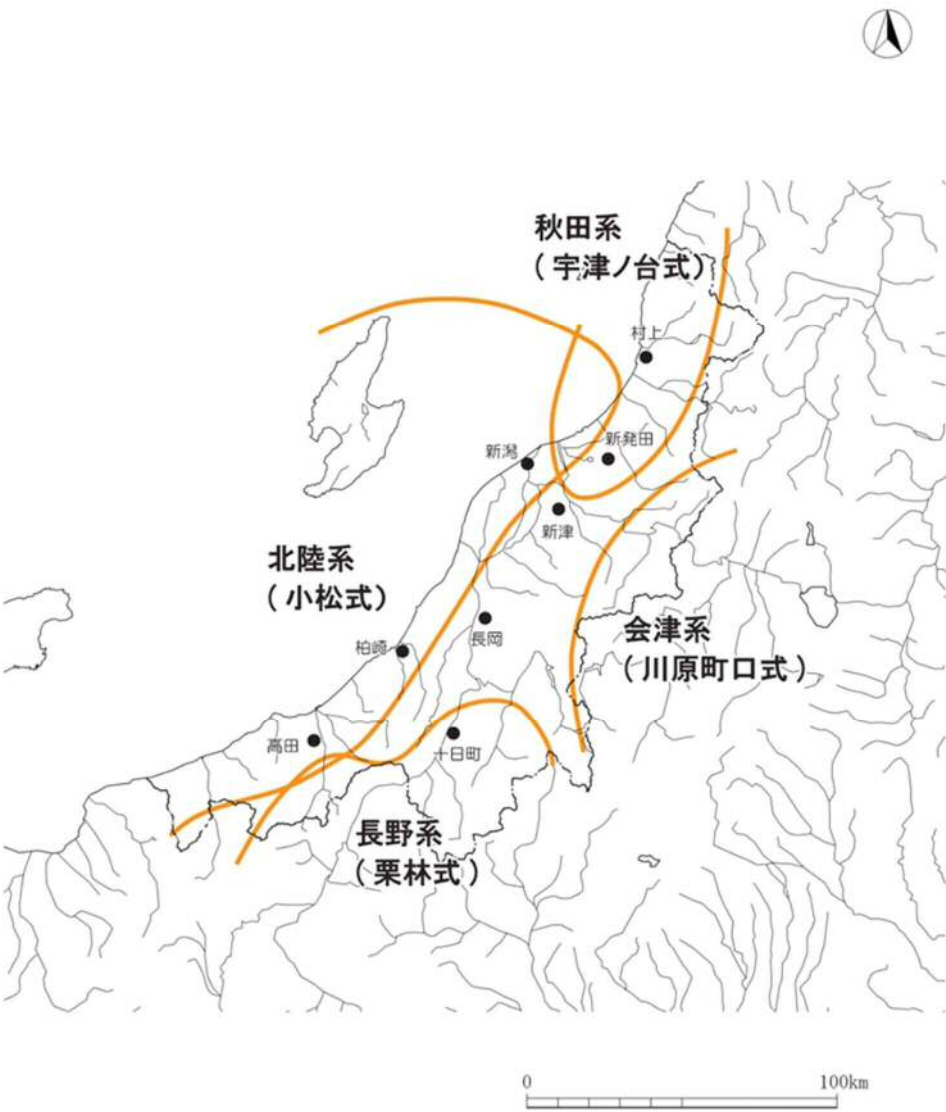
講演会 『三国志』に書かれた「倭国乱」の意味するところ
—韓国・日本の環濠集落と高地性集落—
講師 禰宜田 佳男氏（文化庁記念物課主任文化財調査官）
日時 2016 年 9 月 18 日（日）13：30～15：30
会場 新潟市文化財センター研修室
定員 80 名（無料）
申込み 不要（直接会場へお越しください）

文化財センター学芸員による展示解説
日時 2016 年 7 月 24 日（日）13：30～15：30
申込み 不要（直接展示会場へお越しください）

古津八幡山遺跡と周辺遺跡の関係

東北南部			新潟北部		古津八幡山遺跡					信濃川右岸	信濃川左岸	魚沼	北陸南西部	
弥生時代中期	福島県		桜町遺跡	土器型式	時期	北陸系			東北系	地元系	北陸系 東北南部系 長野系 秋田系	長野系 (栗林)		土器 型式
	中通り	会津	土器型式			環濠	竪穴住居	墓						
		二ツ釜式		山草荷式	—	—	—	—	—					
		川原町口式												
弥生時代後期		和泉		砂山1式	0期						画期・断絶			
		能登	東北南部から									東北南部系 (天王山)	V-1群 V-2群 V-3群	猫橋式
	天王山			砂山2式	1期	環濠の掘削		四隅が切れる 方形周溝墓	SI03S20 SD03S21・SX1005	北陸系	八幡山式土器	不明		
	折衷現象					周溝を持つ 隅丸方形 住居		SI03S02・SI03S21・ SI03N02・SX1006	折衷現象					
	明戸		桜町1式	2期			SI0602・SD03S25覆 土中下層		2-1群 2-2群				法仏式	
		屋敷		3・4期									3-1群 3-2群	月影式
			桜町2式				環濠が 上層まで 埋没	前方後方形 周溝墓？	SI1003 SI0705					
					高地性集落の廃絶							4群	白江式	
古墳早期	稻荷塚遺跡1号竪穴住居 宮東遺跡1号土坑 館ノ内遺跡周溝墓 家西遺跡周溝墓 稻荷塚遺跡周溝墓 男壇遺跡周溝墓 宮東遺跡周溝墓		桜町3式		5期	沖積地の集落出現			居村DSKY1			5群 6群	古唐ウルビ式 高島式	
古墳前期											7群 8群 9群 10群			
古津八幡山古墳↓														

※ 赤字の遺跡名・遺物名は図中品



弥生時代中期後半の土器別分布



弥生時代後期前半の土器別分布